雑事記（11）

迷彩色

盛丘 由樹年

迷彩は、軍隊で敵の目を欺くために、背景に溶け込むように数種の色でまだら模様を不規則に描いたものだ。兵士の服装や、装備、武器、陣地、格納庫などの建築物にも応用されている。敵に見つかりにくいことは、戦いにおいて有利になる。なるべく目立たないほうが攻撃されにくい。現代において、陸軍歩兵などの軍服は、迷彩が基本になっている。戦場において、いかにも兵士とわかるような、それらしい格好して姿を見せては、すぐに敵であることがわかってしまうから、狙い撃ちにされてしまうのだ。ただし、目視では敵味方の識別がしにくくなるから、味方に撃たれてしまう危険が生じるかもしれない。

自然界の生物も、それを応用している例は多い。捕食者に見つからないように体に迷彩を施すことは、生き延びる可能性を高くする。肉食動物が捕食するためにも、獲物がその姿に気づいて逃げてしまうことを防ぐ意味がある。近距離からダッシュするために、気づかれないように、そっと近づくとき、迷彩は断然有利だ。チーター、ヒョウ、トラの模様も迷彩の意味があるのだろう。異性に対してアピールすること以外、色彩豊かな派手な格好をしていては、自然界では生き残れないだろう。ただし、場所によっては、それが逆に、派手になることがある。

迷彩は軍隊で発達したもので、正規の軍服にもなっているのだが、一般のファッションにも取り入れられることが多くなった。軍服がファッションに取り入れられることは珍しくないようだ。例えば、トレンチコートも第一次世界大戦での塹壕戦でイギリス軍が着ていたものという。トレンチは塹壕を意味する。トレンチコートを「塹壕服」と呼んでは、身もふたもないようだ。

街中を歩くと、迷彩色のズボンをはいた若者などを時々見かける。それが流行にもなっている。最近では、小物入れやリュックなどにも取り入れられている。実用上の意味はなくとも、おもしろいデザインの一つになっている。ときには、全身迷彩色の服装をした若者

がいたりして……。着ている側には、もちろん姿を隠すために着ているのではないのだろう。街中では、地味なはずの迷彩色が逆に目立つのだ。（きみたちは、擦り切れて、穴の開いたようなジーパンをはいている方がよほど、よく似合うよ。）

戦場で着るべき服装を街中で見ると、奇異な感じをもってしまう。私などには、迷彩服を着ているのは兵士だというイメージがあるから、ドキッとさせられる。数年前、横須賀で観光気分で写真を撮っていたら、そこは米海軍基地の入り口付近で、近くに置かれた大きな錨（いかり）にカメラを向けたとたん、迷彩色の戦闘服を着た大柄なヤンキーがいきなり飛び出してきて**「写真を撮るな！」**と言われたときの、驚愕した体験が尾を引いているのかもしれない。

そういう私も実は、迷彩物（もの）を買い集めたというほどではないが、その模様が気に入って、二つの帽子・靴・下着のトランクス型パンツを持っている。幅の広い迷彩の帽子をかぶり、丈長の迷彩のバスケットシューズをはいて、街をうろうろすると、おしゃれに敏感な人たちから少しは注目されるかもしれない。ただし、パンツなど人に見せるものではないので、全く意味がなさそうなのだが、汚れやシミがあっても、見た目ではよくわからないから、洗濯を決意するまで、長くはける。

迷彩色の帽子とシューズ

ヤンキー・ゴーホーム

ヤンキーとは、日本で不良少年（少女を含む）のことだそうだ。不良少年をヤンキーという言い方は、もう全国的に通じる言葉になっている。普通の辞書にも載っていないし、まだ新しい言葉だが、不良少年をヤンキーというのには私には違和感があって、少々とまどう。ヤンキーの本来の意味から大きく外れしまっているからだ。

これをアメリカ人が知ったら、激怒しそうだ。世界的にヤンキーといえば、アメリカ人のことを指す。特に北部の、ニューイングランドに住むことたちのことだ。本来、不良少年の意味など、全くない。アメリカではプロ野球チームに、ニューヨーク・ヤンキースがある。大リーグの名門チームだ。その日本の意味では、「不良少年たちの野球チーム」のことになってしまう。とんでもない意味になるから、大リーグから文句が来そうだ。トルコの人たちが、かつて（１９８０年代）日本各地の歓楽街で隆盛を極めた「トルコ風呂」に憤怒したのと同じだろう。

どうして不良少年をヤンキーと呼ぶようになったか、語源が気になって、私はネットで検索したが、はっきりしない。有力なのは「……やんけ」が変化したという説だ。関西の不良少年らが語尾を「……やんけ」とする、ぞんざいな言い方を多用するから、そんな彼らを「ヤンキー」と呼ぶようになったという。ヤンキーという言い方が関西から広まったというのは確からしい。

もう一つに「やんちゃ」から来ているという説がある。やんちゃの語音が変化してヤンキーになったという説だ。やんちゃとヤンキーはどう違うかという疑問を持つ人もネット上に登場している。やんちゃは江戸時代から使われている古い言葉で、広辞苑によると、〈子供のわがまま勝手なこと。だだをこねたりいたずらをしたりすること。また、その子供〉だから、双方は似たようなものなのだ。ヤンキーにはスマートな響きがあるので、定着してしまったのだろう。私としては、やんちゃ説の方に納得がいく。さらに勘ぐると、「やんちゃ」と「モンキー」を合成した言葉なのかしらん、と思ってしまう。彼らはモンキーの群れに似たところがあるから。

「ヤンキー先生」というと、最初何のことかと思った

ら（外人教師のことかと思ってしまった）、若いころ「ヤンキー」をやっていた経験を持つ教諭のことで、その意外な経歴を売り物にして（自称してもいる）、人々の注目を集め、マスメディアに出たりして、今では代議士にまでなっている人だ。ヤンキーをやっていなければ、ただの先生だが、そのマイナスイメージを意外性につなげているのだから、おもしろい。若い時はヤンキーだったが、今では立派に更生しているということだろう。それで名声を得て成功したのだから、それなりに才覚があるのだろう。偏見ややっかみを持ったりしてはいけない。

不良少年たちをもっと別な言い方ができないものか。彼らは、いわゆる非行グループで、古くは愚連隊（ぐれんたい）、何とか団、何とか族、チンピラ、ツッパリ、ワルなどと呼ばれた。（それらのリーダーを総長とか番長とかいう。かれらにはそれなりに統率力や人望があるのだろう。サルの群れにもリーダーがいるけれど……）そんな名前にはどうしても侮蔑的な意味が込められるので、スマートな言い方が求められるのかもしれない。不良少年たちも、自分たちのことをカタカナ語の「ヤンキー」と言えば、少しは聞こえがいいのだろう。やんちゃでは、子ども扱いだ。

そんな経歴を持つ先生が自称する際、「愚連隊先生」では、いかにも人聞きが悪いし、「ツッパリ先生」では、相撲部の顧問をしている先生のことになってしまいそうだ。

ところで、ヤンキーといえば、すぐにひらめくのがゴーホームなのだ。「ヤンキー・ゴーホーム！」

それを新しく解釈すれば、〈不良少年たちよ、家に帰りなさい〉という意味になる。それで素直に家に帰るのなら、もうヤンキーではないだろう。

米軍基地へ行ってはみたけれど

私と米軍基地との関わりについて話し始めると、私が２０代から３０代にかけて、上越方面に行くために車で国道１６号線を通った時に、福生（ふっさ）地区（東京都福生市）を通りかかると、金網の塀を通して、広大な米軍横田基地の飛行場や軍用機の陰が見えた。その途中にあるドライブインで休憩をとるのを常としていた。その福生は基地の町として異彩を放っていた。通りすがりの町ではあったけれど、日本離れしたところが印象的だった。国道１６号はその滑走路とほぼ平行に伸

びていたので、車で通ると、その広さが実感できたし、こんなところで米軍は何をしているのかという疑問も常にわいてきたものだった。沖縄を旅行し、普天間基地の近くに行ったときにも、同様だった。

次に、私が３０代のときだから、もうかなり昔のことになるが、会社の応接室を利用して毎週水曜日の定時後に開催されていた英会話教室の先生が米軍兵士の奥さんで、その招待により、その教室の生徒たち（といっても、ほとんど会社の先輩たち）と一緒に座間キャンプに二度行ったことがある。座間キャンプは、座間市と相模原市にまたがって広い地域を占有し、米陸軍の地区司令部が置かれているという。本格的なヘリポートがあり、輸送用のヘリコプターが複数配備されているし、その部隊の訓練が行なわれているという。兵士たちの居住地域にもなっている。小田急・相武台前駅から北西方面（？）に歩いてすぐに正門があったと記憶している。われわれが行くと、入門手続きも簡略的で、すんなりと通された。その中は、隔離されてはいるものの、アメリカの文化・生活様式が再現されており、門をくぐった瞬間からアメリカの大地に踏み込んだような感覚を受けた。生活に必要な売店（ＰＸ）はもちろんのこと、広い敷地の中にプールや体育館、ゴルフ場（ボールが場外に飛び出して、地域で問題になったことがある）など、運動施設や余暇を楽しむ施設もそろっていた。すべてはアメリカ式だし、英語表記だった。先生夫婦の自宅（官舎）は平屋で、外観は質素に見えたが、中は豪華だった。彼らはジャップたちをよく歓待してくれた。旦那がターキーの肉を切り分けていた光景を思い出す。それも英会話教室の一環だったけれど……。パーティーが開催された広いリビングルームには高級なオーディオ装置などが置かれていた。われわれ生徒たちが押しかけても、狭いと感じなかった。この印象深い体験によって、私にとって米軍基地はあこがれの対象のようなものになったのかもしれない。

近年になって、横浜市立博物館主催で、米軍基地内にある古代遺跡を探訪するツァーがあった。博物館の学芸員が案内し、解説してくれるというのだ。古代遺跡より、むしろ米軍基地を探訪することに興味があったから、さっそく私は応募してみた。応募条件としてパスポートが必要だとのことだった。でも、そのとき、応募者多数のため抽選が行われ、私は外れてしまった……。

２０１１年９月、綾瀬市にある米海軍・厚木基地へ行った。この日は秋のフェスティバルとかで、基地が一般市民に公開されるというので、相鉄・さがみの駅から基地の正門まで歩いていった。ただし、基地に入るにはパスポートや本籍地の記入された自動車免許証などの提示が必要とのことだった。私は新しく更新してまもなくの自動車免許証を持っていった。正門前はでは、多くの人が入門チェックを受けており、それに時間がかかるようで、なかなか進まない。チェックする係員が少なすぎるのだろう。それを待つ人が群れを成して並んで待っている。基地の塀を取り囲むようにずらりと並んでいる。私もその列の後ろについた。のろのろと少しずつ前に進むのだが、止まっていることが多かった。並んで待つことが嫌いな私は、うんざりしながらも３０分ほどその列の中にいたが、門が近づくにつれ、その入門条件が気になり始めた。本籍地の記入された自動車免許証は古いタイプのものなのだ。新しい免許証にはその表示はなく、ＩＣチップ記録になっているのだ。入門チェックの係員が、その記録を読める機器を用意すればいいだけの話なのだが、そうしていないのだ。本籍地を明示できないなら入門は許可されないと思い、パスポートを持って来なかったことを後悔しながら、私は入門の直前で列を離れた。基地側がどうして入門者の本籍地を知る必要があるのか、疑問と不満を持った。

厚木基地の正門前で

２０１４年３月３０日、横須賀の米軍海軍基地の春のフェスティバルに行った。「米軍海軍基地と横須賀軍港巡りクルーズ」という旅の団体バスツアーに加わったのだ。天気予報はあいにく雨だった。催行（さいこう）の中止

が懸念されていたが、フェスティバルはやっているという。東京から高速道路を経由して横須賀に来た。小雨が降る中、傘をさして歩いていくと、三笠公園の広い広場の前には、これまた長蛇の列があった。ロープが張られ、大人数の入場希望者たちは、いやおうもなく蛇行させられていた。天気の悪い日にこれだけ多くの人が詰め掛けるとは、驚きだった。それを見てうんざりさせられたが、比較的前に進む速さがあったので、しばらくするとテントのところに着き、入門チェックを受けることになった。大勢の人を受け入れるために、一カ所や二カ所だけでなく、１０カ所ぐらいでチェックを行っていたのは、よい対応だった。普段ここは通用門らしく、この日のために大きく開けていた。ここでの入門チェックは持ち物検査だけで、航空機の搭乗手続きで金属探知するようなことをやっていた。私はすぐに入れた。それからは単独行動だった。

雨風が強くなり始めた。基地内ではサクラが見ごろになっていたが、多くが花びらを散らしていた。道のところどころには、監視のための兵士たちがたむろしていた。彼らはだいたい迷彩色の服とブーツで身を固めていた。一般人が歩けるところは、さすがに制限されていたが、今日はカメラをとってもいいらしく、私は遠慮しながらも写真を撮った。テント張りの出店が多く並んでいた。中にいるのは迷彩色の服を着た兵隊たちだ。バーベキューなどの食べ物が主な商品だ。特に、ここではビザが名物とされ、大型の箱入りのものが３０００円で売られていた。この日ばかりは円でもドルでも通用するらしい。

風雨が強いため、私は映画館に退避した。古い映画館のたたずまいを色濃く残していて、なかなか趣がある建屋だった。今日は映画をやっているわけではなく、フェスティバルの屋内会場になっていた。その中は広く、多くの観客が座っていた。まもなく舞台上で基地の司令官や横須賀市の幹部連中が列席し、セレモニーを行なうというので、私も前の方に座った。セレモニーは興味なかったが、その後、兵士の有志による歌とバンド演奏があった。３０分ほど聞いていたが、元気のいいアメリカンソングやおなじみのビートルズの曲なども聴けて、私は満足だった。通路や壁際に立ち見する人が大勢いたほどの盛況だったのだが、防災上、支障があるとのことで、気の毒にも、途中で彼らはみな追い払われてしまった。

しかし外はますます雨風が吹き荒れていたので、フェスティバルは時間を短縮し、早めに終わるという。大して歩き回りもせず、米海軍が誇る艦船や装備などの展示を見ることもできず(どこに展示されているか、わからなかった)、物足りないところがあったが、ツアーの時間の制約もあったので、帰途に着いた。出店の呼び込みの人が「ピザ二枚で２０００円！」と叫んでいたが、無視して、雨風に耐えながらバスが停まっていた横須賀駅近くまで歩いた。おまけに、ツアーのもう一つの呼び物、観光船による横須賀軍港巡りクルーズも中止になった。港内には米海軍が誇る原子力空母が停泊していたというのに……（原子炉の点検整備のため長期停泊していた。低レベルの放射性廃棄物を搬出）。代わりに、巨大模型のような戦艦三笠を見物することになってしまった。

映画館のひさしで雨宿り

三笠公園の一角にある戦艦三笠（別の日に撮影）

そのイギリス製の戦艦の中を見て回るのは、私にとってこれが初めてだったけれど、入場料を払ってまで見る価値はどうだったか。

２０１４年５月３日再度、米軍厚木基地へ行く機会があった。「スプリングフェスティバル」で基地が一般公開されるのだ。私は開門の１０時前に行く予定にはしていたのだが、言い訳すると、家の事情があって、大分遅れてしまった。さらに、海老名駅で発車間際の電車に飛び乗ったのはよかったけれど、それは最近運航を開始した特急電車だった。さがみの駅には停まらずに、大和駅まで運ばれてしまった。各駅電車で引き返し、さがみの駅から歩き、米軍厚木基地の正門に着いたのは、１１時２０分ごろだった。正門の近くから、基地の中をのぞくと、塀越しに航空機の機体の一部が見えた。自称・航空機マニアとしては、今日こそ見て回りたかった。

入門で待たされることは、覚悟していた。しかし、正門の人だかりから基地の塀に沿って歩道上に人また人の長い列が続いていた。多くの人が訪れているのに、一人一人の入門チェックに時間がかかっているのだ。横に二人並んだ縦の列が、厚木基地を取り囲むように、どこまでもどこまでも続いていた。以前、来たときにはこんなに長くはなかった。私は行列が長いかもしれないと考えていたものの、推測をはるかに超えていた。さながら基地に反対するデモ隊のような列ができていた。デモ隊と違って、この列はおとなしく、基地に反対を表明するものなど一人もいない。とりあえず私は前に歩いていた人に続いて列の後ろについた。それは、ずっと先で折り返していた列の最後尾とわかった。どこで折り返しているのか気になっていた。直線道路が続いていたが、はるかかなたを見渡しても、終わりは見えなかった。広大な基地の塀に沿ってずっと向こうまで列が続いていた。金網越しに基地の中を覗き込んでも、ほとんどおもしろくない。どこまで続くのだろうか。いらだちを抑えながら、おとなしく列の中にいた。周囲の中には、３時間待ちだという者もいたが、私は〈冗談だろう〉と思った。

「風があるからいいね。この日差しで、風がなかったら、たまらんよ」などと、後ろにいた人が話し合っている。基地の壁のところどころに、入場の条件が書かれたポスターが張り出されていた。それは今日のフェスティバルの入場者のために書かれたもので、正門からかなり離れたところにもあった。列がここまで伸び

ることを予見して張られたものに違いなかった。
それは、3年前の時と同じ内容だった。そこで要求しているのは。パスポートまたは「本籍地が記入された免許証」、写真つきの住基カードなどだ。「本籍地が記入された免許証」など、もうとっくに更新されてしまい、いまどき世の中にないだろう。私はしっかりパスポートを持ってきた。
後ろにいる中年の男たちがそれを見て話す。
「オレは免許証を持って来たけど、本籍地は書かれてないよ。入れるかなぁ」
「入れてくれるだろ」
「いや、軍隊だから、ダメなものはダメというかもしれない」
「何時間も並んで待った末、『これじゃ、ダメ』といわれたら、もう笑うしかないよ」
「オレは、もう降りようかな。ここまできたら、海老名駅に行くのも同じだろうな」とスマホで現在地を確認していた。しばらくすると、うしろの男の一人が脱落した。
われわれの列は、炎天下で、のろのろと進んでは止まりしていた。前にいた一人は、用意がいいことに、折りたたみの椅子を帯同し、列が止まっている間は、それに腰掛けていた。
歩道の上で、上り下りの列がお互い、顔を見ながら行き交っていた。家族づれの人たちが多いし、若い女性たちのグループも目立つ。でも、会話は少ない。ベビーカーに乗った幼児たちはほとんど眠っていた。たぶん、基地の中に入っても子供たちは眠っているのだろう。列が続くが、まだ折り返し地点が見えなかった。
私の左手が広々とした厚木基地で、それに沿って直線道路が続いていたが、遠くに交差点が見えていた。その交差点あたりで列が折り返しているのだろう、という私の淡い期待は裏切られた。交差点で左に折れると、フェンス内は中学校になっていた。まだまだ列は続いていた。その中学校は厚木基地とは隣接していたが、基地とは関係ないらしい。そこで、同じスポーツウエアを着た少年少女たちが、おそらく部活をやっていたのだろう。その一人の中学生が、金網の塀に走りより、われわれに質問してきた、「今日は何かあるんですか？」
「厚木基地のお祭りよ」と列の中の一人が答えていた。その少年は、あきれたような顔をして塀から離れた。中学校を過ぎると、広い公園があり、ようやくそこで列が折り返していることがわかった。折り返し地点が

見えたところで、私もいいかげん疲れたから、脱落することにした。こんな状態でもう1時間が経過していた。腹も減ったし……。このままだと入場まで3時間待ちという、冗談だと思えた事態が現実のものとなることが予測できた。私は茫然自失して公園の木陰でしばらく休んだ。さて、ここからどうやって帰ろうか。なお、私のように脱落するのはほんの例外的で、ほとんどの人は辛抱強く列についていた。

後で地図で確認すると、厚木基地の正門からその公園まで、1．6キロある。たかが米軍基地の「スプリングフェスティバル」を見に行くために、日本人がぞろぞろと何時間も待って入場しようとすることに、私は腹立たしささえ感じてしまった。基地側の入場手続きがもたもたしていることもあるが、そんなことより、日本人の数の多さにあきれてしまった。彼らにとって5月3日というせっかくの休みなのに、こんなところで並んで待つことに多くの時間を過ごしてしまうのは、どうかと思うのだ。翌日の5月4日付の神奈川新聞によると、その日、5万5千人が訪れたという。そんな多くの人が入門できたとは、とても信じられない！

負け惜しみ的に、あるいは利己的に言い放てば、「きみたちのおかげで、軍用機を間近で見られる機会を失ったではないか！　ここは物見遊山で子供連れで来るところだろうか。最新兵器を備えた軍隊が軍事行動するための前線基地なのだ。戦闘機が爆音を響かせて発進する滑走路がそこにあるだろう。未熟な若い兵士のために操縦訓練の一環としても使われているのだ。それら軍用機が故障や操縦ミスによって墜落する危険が常にある。攻撃の拠点であるし、逆に敵に狙われて、いつミサイルを打ち込まれてもおかしくないような危険なところなのだよ。もしも某国でミサイルが発射されたなら、きみたち周辺に住んでいる人は、広い基地内での被害にとどまるように、正確に打ち込まれることを神や仏に祈りたまえ」

次回はもっと早めに出かけよう。